

〈書 評〉

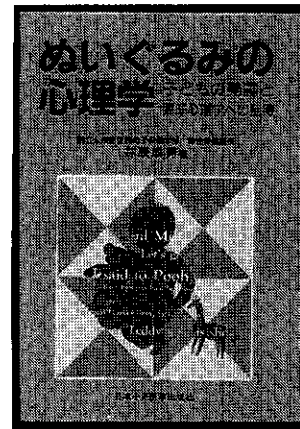
ぬいぐるみの心理学

井原成男 著

子どもがぬいぐるみを抱いて離さない現象に触れる機会は多い。育てている子ども、或いは自らの幼時の体験、保健福祉従事者としての経験等数えればきりがないだろう。この現象はウィニコットによって提唱された「移行対象」のひとつとして考えられている。「移行対象」とは自立の過程にとってなくてはならないプロセスとして位置付けられるものであり……と心理学を専門としない書評者は書いてあるうちに分からなくなってしまう難解な概念である。これを説き明かした書物となるときぞや冒頭より息をつめての精読を強いられるかと思いきや、本書は具体的で平易な語り口である。著者と直接話したことのある者には、本文の文体からあのソフトでしかも内容の深い話し方が思わず彷彿とされる。

ぬいぐるみにしがみつくとということの意味を、臨床的に出会う母親からの分離や自立につまづいている多くの具体的な症例を例にとって読者に理解させようとする試みは、きわめて意欲的なものである。難解な概念を手持ちの症例によって解釈を試みるだけでも相当な内容であるが、著者はこれに加えてさまざまな発達理論をもちだしてこの移行対象なる現象の理解の助けとする議論を展開している。ハーロー、ピアジェ、マラー等巨匠のあるいは教科書等で見ることも多い有名な理論、実験等をこの現象の理解に結びつける考察力に触れるにつけ、心理学という体系そのものの奥の深さを思い知らされる。

有名な児童文学に登場する毛布やぬいぐるみの下りは楽しい。著者は日頃実に多くのことに関心を持ちしかもユーモアのセンスをもってそれらに解釈をつけ周囲の者を飽きさせないが、そのような心の自由さというか、余裕が、児童文学への造詣を深くしているようにも思われる（という



ほど単純なものではないのだろうが、この辺をさらに正確にしようとする書評の本論から逸脱するのでお許し願う)。

第I部を読めば移行対象のイメージと理解が出来上がる(ことが意図されている)。さらに第II部では、第I部でのさまざまな考察が難解なウィニコットの理論体系そのものとの関連のもとに、さらに大きいくくりとしての人間の心の発達に関する深い洞察となって展開されている。移行対象へのイメージを症例をもとにより鮮烈にすることによって、ウィニコットの理論に関してこれまでされている幾多の解釈をこえる解釈を導きだしているとのことで、最近の心理学の動向のなかでも極めて意義の深い議論となっているのにちがいない。

ウィニコットの理論自体難解であるがために発表当時なかなか受け入れなかったそうだが、その意義を新たに見いだし続けている著者の今後は大きく期待されるだろうと思わずにはいられない。

加藤則子 (母子保健学部)